日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

イエス は 主なり

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリストの新しい祈祷運動である。

開心 ・ 静聴 ・ 充満 ・ 献身 ・ 奉仕

〒165-0027 東京都中野区野方 1-55-1　天門教会内　日本クリスチャン・アシュラム連盟　振替口座　東京 00100-1-4558

400年前のキリシタンの生き様と今も生きているみことば

九州アシュラム支部長
岡山 敦彦

牧会から退き少し自由な時間を与えられ、今までできなかった学びができるようになりました。その一つが、「隠れキリシタン」の学びです。

フランシスコ・ザビエルはイエズス会から東洋に宣教師として遣わされ、1549 年 8 月 15 日に鹿児島に着きました。以後平戸、山口、堺、京の都へと足を延ばし一旦平戸に戻ってから、山口、府内(大分)を巡回し、最後は中国のマカオにて亡くなります。当時は貿易船(南蛮船)に同乗してヨーロッパから東洋まで来ますが、嵐や海賊の難に遭遇して、約半数の船が目的地にたどり着けなかったと言われています。宣教師として遣わされることは命がけの旅でした。

キリスト教が急速に九州を中心に西日本に広がりました。多くの宣教師が日本に送られます。宣教師ヴァリニャーノは一つのプランを立てます。日本の若者をスペイン、ローマに送り出すことです。天正遣欧少年使節団派遣の計画です。キリシタン大名の名代として伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノたち 12 歳前後の 4 名の少年が送り出されます。目的は二つ、ローマとスペインからの日本宣教への献金の要請と、日本の若者がヨーロッパのキリスト教文化を知り日本人が日本人に宣教できるようにすることでした。4 名は 1582 年旅立ち、1590 年に帰国しました。その間に豊臣秀吉によって 1587 年「伴天連追放令」が発布され、宣教師たちへの迫害が始まります。

次は伊達藩の支倉常長です。国宝の彼の肖像画が仙台市博物館に展示されています。時の藩主伊達政宗には野望がありました。政宗は、通商交渉が失敗しても徳川幕府から責任を問われないよう、下級武士の支倉常長を団長とした使節を、石巻で建造したサン・ファン・バウティスタ号で 1613 年 10 月に送り出します。支倉は、出発時はキリシタンではありませんでしたが、同行した宣教師ルイス・ソテロの深い感化もあってスペインのマドリードで洗礼を受けます。彼を遣わす目的は、メキシコさらにスペインとの通商により伊達藩の財政を潤すことでした。政宗は、「自分は洗礼を受けていないけれど、キリスト教を保護している」と書状に記します。ところがイエズス会の宣教師からのレポートで、日本ではキリスト教徒への激しい迫害が起こっていることが報告されていましたので、伊達政宗が二枚舌を使っていることを見破られてしまいました。支倉は 1620 年 9 月に傷心の思いで通商条約不成功の報告を胸に仙台に戻ります。通商交渉が失敗だったことが分かると、伊達政宗は手のひらを返したように自分の藩でもキリシタンへの迫害を始めます。

ペテロ・カスイ岐部は、1587 年大分県国東半島で生まれ、島原のセミナリヨ(キリスト教の初等教育の学校)を卒業して宣教に従事します。司祭になることを強く欲していた彼は、ポルトガル人司祭の日本人への強い偏見のため日本で司祭になることは不可能と分かり、ローマに行って司祭になることを決断し、1615 年に日本を発ち、マニラ、マカオ、ゴア、エルサレムを経てローマに着き、念願の司祭となります。1630 年日本に帰国しますが、それまでの 15 年の歳月は苦難の連続でした。一方で素晴らしい信仰者との出会いを通して多くの恵みを受けました。帰国後、長崎から伊達藩の領内へと移り住みます。そして多くの隠れキリシタンたちを励ましますが、密告されて水沢(現在の岩手県奥州市)で捕らえられ、江戸・小伝馬町で信仰を捨てさせるための厳しい裁判を受けます。吊るし刑を耐え忍び、最後にこう叫びます。「ペテロ・カスイ岐部は転び申さず候。」52 年の生涯を閉じ、主の御許に凱旋していきました。

４００年前のキリシタンの生き様から、多くの苦難を味わい尽くしながらも平安のうちに天に召されていった彼らの信仰を学びました。

「私はすでに注ぎのそなえ物となっています。私が世を去る時が来ました。私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました」(テモテへの手紙第Ⅱ　４章６～７節)

霊想　福音の種を蒔き続けよう

日本バプテスト連盟 早良キリスト教会
牧師　加山 献

マタイによる福音書 13 章 1 節～9 節

1　その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。
2　すると、大勢の群衆がそばに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろされた。群衆は皆岸辺に立っていた。
3　イエスはたとえを用いて彼らに多くのことを語られた。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。
4　蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。
5　ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。
6　しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。
7　ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。
8　ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。
9　耳のある者は聞きなさい。」

イエスさまは、当時のガリラヤの人々が暮らしている素朴な日常の風景を用いて、たとえ話を語られました。農夫、羊飼い、漁師、商いをする人、主婦、しもべや召使い、王と家臣たちの話など、彼らが暮らす世界がイエスさまのたとえ話の舞台でした。そこは人間が自然と向き合いながら、共に生き、共に苦しみ、共に働き、共に喜んでいる小さな世界です。本質的には、今の私たちが生かされているこの時代と、ほとんど変わらない世界だと言って良いかもしれません。

13 章にはイエスさまの語られた、たとえ話が 7 つ記録されていますが、その一つ目がこの「種を蒔く人」のたとえです。イエスさまがこのたとえ話を通して語られたことは、今まさに、この場所で起こっていることに関わりがあります。今まさに、種蒔きがおこなわれている時です。

私たちが礼拝に集う時、インターネットや書籍などで聖書のメッセージを聞く時、もしくは自宅で一人静かに聖書を開く時、それこそが種蒔きの時です。

この種を蒔く人はイエス・キリストご自身を表しています。そしてイエスさまが蒔く種は「御国の言葉」「天国の言葉」であると説明されています。そして種が蒔かれる大地は私たちの心を表しています。

【すべての人の心に、種が蒔かれている】

ドイツの詩人であるゲーテは、信仰深い家庭に生まれましたが、一時期、信仰から離れたことがあります。その頃に書いた書物の中に、この種蒔きのたとえに言及した文章があります。その中でゲーテは、道端にも、石だらけの土にも、茨の間にも、同じように種を蒔く人のことを皮肉たっぷりに述べています。「もう少し頭の良い農夫なら、こんな蒔き方はしないだろう。」

つまり、頭の良い農夫なら最初から良い土地にだけ種を蒔き、種を無駄にすることはないだろう、ということです。しかし、一見無差別に、無駄に種が蒔かれているように見えるところに、このたとえ話の核心があります。つまり、すべての人の心に種が蒔かれている、ということです。

たとえ無関心であったとしても、固い心であったとしても、いばらの心であったとしても、天国の言葉はもれなく届けられます。

イエスさまは 9 節で言われます。「耳のある者は聞きなさい。」この天国の言葉をどのように聞くかは、私たちに委ねられています。種に違いはありませんでした。違いは土地の状態にありました。天国の福音が宣教される時も同じです。福音はいつも変わることはありません。違いは聖書の言葉を聞く一人ひとりの心の状態にあります。

このたとえ話には、私たちは福音をいかに聞くべきか、というテーマがあります。今日、私たちはこの聖書の言葉をどのように受け取っているだろうか、ということに関心を向けてみたいと思います。

【教会もまた種を蒔く人となる】

二番目に分かち合いたいことは、主イエスに従う教会もまた、種を蒔く人となっていく、ということです。13 章の 1 節はこのように始まっています。「その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。」

その日、とはいつか、ということですが、実はマタイの 13 章は 12 章全体と繋がっています。12 章でどのようなことがあったかと言いますと、イエスさまが宗教的な指導者たちから悪魔呼ばわりされ、会堂を追い出され、そして最後には、イエスさまの家族でさえも、イエスさまの働きに懸念を示している、ということが明らかになりました。それが 12 章の内容です。一番近くにいて、一番応援してほしい人たちからも理解されなかった。それがイエスさまの伝道の旅路でした。

今日の箇所でも、大勢の人々がイエスさまの話を聞きに来ます。またイエスさまに癒してほしい人たちも大勢やって来ました。しかしその群衆の中で、最後までイエスさまに従っていった人々はとても少なかったのです。

みんながイエスさまの話に聴き入っていました。みんながイエスさまの教えに耳を傾けていました。けれども、全員がイエスさまの教えを心の底から悟ったわけではなかったのです。もちろん言語的に、知識として理解することはできました。聞いたこと

に関して、「とても良い話だ」と賛同する人も多かったと思います。けれども「聞いて悟る」ということは、明らかにそれとは別のことを意味しています。

「聞いて悟る」とは、生き方が変えられることです。悟った人は、自分が何か見えない力に捕らえられたことを感じます。その人は自分が召されていること、神さまに呼ばれていることを知ります。その人は自分が神さまに求められ、必要とされていることを知ります。

また、悟った人は自分に何が足りないのか、何が欠けているかを知ります。その人は自分の人生に本当に必要なものが何なのかを発見します。その人は差し出されている救いの手を認めます。自分の状況を悟った人は救いの手にしがみつきます。

「種を蒔く人が種蒔きに出て行った」とイエスさまは語り始めました。種を蒔く人は、私たち一人ひとりでもあります。この世界という畑に住み、喜びながら、あるいは悩みながら生きるすべての人への愛に促されて、種蒔く人は出かけていきます。人々はそれを受け取らないかもしれない。それでも、無駄に思えるほど、豊かに蒔くのです。

伝道がうまくいかず落胆する全ての教会に、このたとえ話がはっきりと教えることがあります。それは「必ず来る」ということです。ある種は道端に落ちて、ある種は岩場に落ちて育たず、ある種はふさがれたままで枯れてしまう。それにもかかわらず、必ず収穫の時は来ます。種の成長には時間がかかるかもしれません。けれども、必ず収穫の時はやって来ます。

立証 1　心に溜まっていたアシュラム

日本キリスト教団　京都復興教会　信徒　吉田 悦子

アシュラムを知ったのは、受洗祝いにいただいた、榎本保郎先生の旧約・新約二冊の『一日一章』というご本に出会った時です。それ以来出席する機会はありませんでしたが、ずっと心に溜まっていました。そのりっぱなご本の内表紙に、イザヤ書30章15節「あなたがたは立ち返って、落ち着いているならば救われ、穏やかにして信頼しているならば力を得る」との御言葉を添えてくださっていました。その姉妹は家庭集会に招いてくださり、受洗にまで導いてくださったのです。

その御言葉の意味を深く理解することもなく、弱い私は、強くなりたいと単純に思い、聖書を読み進め、その対照箇所を読みました。読んでもなかなか解らず、祈祷会で優しく接してくださっていた兄弟に質問し、教えていただきました。翌週には必ず、レポート用紙に答えを書いてくださいました。ある時、「信仰はお勉強ではありません。努力するものでもありません。解らない箇所はそのままにして読み進めなさい。注解書もいりません。必ず恵みとして受け止められる時が来ます」と導いてくださいました。

あれから 30 年、解らない時は今でも、榎本先生は、ここからどのような恵みを受け止めなさいと言っておられるのかと、座右の書にさせていただいています。あの時、期待していた「力」をいただいて強くなったのかと言えば**弱い**ままです。けれど信じて穏やかにして祈るならば頭を起こしてくださり、進むべき前方に**光**を、**力**を、感じさせてくださっています。

アシュラムとは、祈ること、御言葉を深く味わうこと、恵みを分かち合うことを大切にする会です。一昨年、昨年と二度「関西アシュラム」に出席させていただき、この恵みに与かることができました。

今は、自分の力は要りません。「力を捨てよ。知れ、わたしは神」と唱えています。

立証 2　第 55 回関西アシュラムに参加して

日本キリスト教団　香櫨園教会　信徒　立石 良子

一昨年の第54回関西アシュラムは大阪クリスチャンセンターでの半日アシュラムでしたが、昨年の第 55 回アシュラムは、同じ会場で 10 月 10 日（月・祝）午前 10 時から午後 5 時までの一日アシュラムとなりました。

私たちの教会からは、宮本牧師、西村兄、菊谷姉、榊原姉、私の 5 人が宮本牧師の車で出席しました。「アシュラムで出会った人たちと今年も会えるかな、また神様はどのようなことを教えてくださるだろうか」と期待と楽しみの気持ちで一杯でした。

今回の助言者には、東京聖書学校前校長の島隆三牧師をお迎えしました。

聖書はテサロニケの信徒への手紙第一 1 章、3 章。島牧師は力強く御言葉を語ってくださいました。その中で、私の胸に強く響いてきたのは「聖書を神の言葉として聞き、受け止めているか？」「聖書を信じているか？」「聖書を神の言葉として信じて読む、ここに信仰が生まれる」。今のお前はどうか。人の言葉として、時には疑いながら読んでいないか。私の心は誰かにドンドン叩かれているようでした。うたたねしているような日々から、目が覚めたような感じがしました。

アシュラムの最後に「イエスは主である」をみんなで唱和して散会しました。

これからもアシュラムでの出会いを大切にしていきたいと思っています。終わりに、テサロニケの信徒への手紙一の 2 章 13 節の御言葉に感謝します。「このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです。事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです。」

第 54 回城北アシュラム報告

日本キリスト教団　天門教会　信徒　西舘　あけみ

日時　2 月 11 日(土･祝)午前 10 時～午後 4 時 45 分
主題　「目からうろこ」
福音の時　新宿西教会　深谷美歌子師
会場　山崎製パン総合クリエイションセンター

アシュラム前日の東京は雪が降り始めましたが、当日は快晴に恵まれ、貴村師が運転する車で会場の市川へ向かいました。素晴らしいチャペルに案内され、午前 10 時からプログラム通り進行し、オリエンテーションに始まり、開心の時、そして祈りの細胞の時となりました。

私はいつも朝のディボーションにおいて、毎日旧約と新約聖書 2 章ずつ読み、そして祈り、一日をスタートしています。最近「祈り」について思い巡らしておりました。私の祈りは何だかいつも自分の願いばかりを祈っているのではないのかと気づかされました。

サムエルの「僕は聞きます。主よ、お語りください」という祈りが欠けていることに気づかされ、今回私に必要な御言葉をいただきたいと思い出席しました。

そして静聴の時、詩篇 62 篇 11 節「神は、一度告げられた。二度、私はそれを聞いた。力は、神のものであることを。」ヨブ記 33 章 14 節「神はある方法で語られ、また、ほかの方法で語られるが、人はそれに気づかない。」詩篇 59 篇 17 節「私の力、あなたに、私はほめ歌を歌います。神は私のとりで、私の恵みの神であられます。」これらの御言葉が与えられ、主に何度もお聞きし、気づかせていただき、祈りの器として整えられたいと思いました。

その後の福音の時で、日々のディボーションにおいて霊の目を妨げる「うろこ」を落とし、新たにされて一日をスタートすることを教えられました。まことに鈍く、なかなか悟ることの出来ない者ですので、主のお助けを切に祈り、霊的に成長させてくださいとの祈りをしてまいりたいと教えられ感謝しました。

恩寵溢れる歩み

本年 97 歳になられる連盟理事長(関東地区アシュラム委員会委員長兼務)の横山義孝師は少し難聴になられていますが、お元気に礼拝のご用やいくつかの会議などにも立っておられます。先生の信仰の原点は、ご自身がお書きになった「恩寵溢れる歩み―70 年の伝道の恵み―」の前書きに表されています。

1945 年 12 月 10 日、浦和別所教会において神戸神学院の校長を務めておられた沢村五郎師による、戦後最初の特別集会がありました。海軍から空しい思いで帰ってきた小生にとって、神のみ声を伺う最初の集会でした。これからどう生きるべきかを考えていた者に、語られたメッセージは予想もしない恵みとなって、自分の魂が吸い付けられるのを覚えた集会でした。

沢村師はヨハネ福音書 11 章のラザロの復活のテキストから、姉妹のマリアが「イエスの足もとにひれ伏し『主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかったでしょうに』」(ヨハネ 11:32)という御言葉から、”もしイエス・キリストの恵みがこの日本の同胞に伝えられていたならば、第二次世界大戦で何百、何千万人という日本と東南アジアの同胞が死ぬことはなかったでしょう”と。このメッセージが私の魂に深く刻印されたのでした。私はこの時「そうだ、この福音を日本の同胞に伝えたい」との素朴な思いが心の底から込み上げてくるのを覚えたのです。集会が終わって父(横山英雄)と二人だけになった時、父に「伝道したいです」と一言告白したのです。すると「祈っていたぞ」という言葉が父の口から返って来たのでした。私の直接伝道への献身の思いはここからスタートしたのです。それから 70 年、顧みて全く罪の存在でしかなかった者を、主は御用に立てて下さって今日まで至りました。ただただ主のご恩寵の溢れるほどの深さ、高さを覚えるのみです。

編集後記

この原稿を書いている 3 月初め、コロナの新規感染者数も大幅に減っています。コロナ感染対策に最大の注意を払いながらアシュラムを開いてきた地区、アシュラム開催を断念せざるを得なかった地区もありました。三年振りに、感染を心配せずアシュラムを開催できる日が近づいていることを主に心から感謝します。私の属する九州アシュラムも 3 回休みましたが、今年の 9 月には、顔と顔を合わせてアシュラムの友とお会いできることを楽しみにしています。皆さんも、お互いの平安と無事を会って確認しましょう。(編集責任者　岡山敦彦)

前号 210 号訂正

前号 210 号巻頭言文頭、「聖書にはマリアという女性が 9 人ほどいる。」を「聖書にはマリアという女性が 9 人程おられる。」に訂正いたします。

事務局より

事務局の仕事は、アシュラム運動の啓蒙、各教会との連絡、皆様からお捧げいただく献金と経費の管理など、またアシュラム誌の発送、理事会や委員会の準備と連絡を主に受け持っています。行き届かないこともありますが、どうぞ事務局のためにもお祈りお支えくださいますようお願いいたします。

なお、アシュラム誌の発送増減、またご家族の中でご召天、転居、発送停止のご意向等がありましたら、事務局までご連絡ください。

☆メール
TENMONKYOUKAI70@outlook.jp
☆TEL・03-3385-7491

アシュラム予告

浦和別所教会アシュラム
日時・3 月 18 日(土)～19 日(日)

横浜岡村教会アシュラム
日時・7 月予定

九州アシュラム
日時・9 月 17 日(日)～18 日(月・祝日)
場所・福岡市近郊予定

関東アシュラム
日時・9 月 18 日(祝月)～20 日(水)
場所・山崎総合クリエイションセンター(市川)

函館栄光教会一日アシュラム
日時・10 月 9 日

その他、開催が予定されていますアシュラムがありますなら、お知らせください。